

神奈川大学工学研究執筆規程

2019年6月24日
2022年11月30日改定

1. 名称

本誌の名称は、和文名で『神奈川大学工学研究』、英文名で『Technology Reports, Kanagawa University』とする。

2. 目的

本誌は、本学で工学分野の研究を行う学部・大学院研究科および研究所・センター等組織の記事を掲載する工学系の機関誌であり、各組織の事業および研究の成果を公表することを目的とする。

3. 運営および原稿の採否

本誌の編集・発行および原稿の採否は、工学部広報委員会および工学研究所所報編集委員会が合同で組織する神奈川大学工学研究編集委員会（以下、編集委員会という）が行うものとする。

4. 投稿資格

本誌に対する投稿資格は、以下（１）～（６）に該当する者がこれを有する。ただし、（５）に掲げる者および（６）で原稿執筆を依頼する学外者については、編集委員会が定める執筆承諾書を工学研究所へ提出することにより、工学研究所への原稿の著作権の譲渡に同意すると共に、神奈川大学研究倫理綱領（以下、倫理綱領という）の遵守を誓約する。

（１）本学工学部の教授、准教授、助教、助手および教務技術職員

（２）工学部以外に所属する本学専任教員で工学分野を専攻する教授、准教授、助教および助手のうち、工学研究所所員として登録されている者

（３）工学部以外に配属されている本学教務技術職員で、前号に掲げる工学研究所所員と共に工学分野の研究や業務にあたる者

（４）工学研究所共同研究または工学研究所プロジェクト研究に研究分担者として参画している研究所客員教授、客員研究員、特別研究員

（５）前号に掲げる研究分担者以外の者で、工学研究所共同研究または工学研究所プロジェクト研究に研究分担者として参画している外部機関（大学、研究所、企業等）に所属する者。

（６）その他、編集委員会から原稿を委嘱された者。

5. 記事の区分

本誌が掲載する原稿（以下、記事という）は報告書としての性格を持つものとし、原著性を要求しない。記事の種類は、以下（１）～（１２）の通りとする。

（１）論説

これに該当するものは、学問・技術・工学系各組織の事業・動向等に関する論説、意見を綴った記事である。原則として４頁程度。

（２）総説

これに該当するものは、特定の分野や主題について、関連する文献や資料に基づいて総括的に論評した解説的色彩の強い記事である。原則として４頁程度。

（３）受賞研究の紹介

これに該当するものは、第４条に掲げる投稿資格を持つ者が所属学会等から顕著な功績のあったことを評価された研究や業績について紹介した記事である。前年度に受賞等の対象となった研究や業績の内容を要約する。原則として５頁以内。

（４）学部特別予算重要機器整備費関連研究報告

これに該当するものは、神奈川大学より学部特別予算として重要機器整備費の助成を受けた研究の報告書である。本助成により導入された研究設備等を用いて実施された研究で、導入年度から２年間で得られた成果を要約する。原則として２～５頁。

（５）私学助成関連研究報告

これに該当するものは、国や地方自治体等所管の機関より教育研究装置等施設整備費の助成を受けた研究の報告書である。本助成により導入された研究設備等を用いて実施された研究で、導入年度から２年間で得られた成果を要約する。原則として２～５頁。

（６）工学研究所共同研究報告

これに該当するものは、工学研究所より研究費の助成を受けた研究の報告書である。共同研究Ａ・Ｂ共に前年度の成果を要約するが、研究期間２年の共同研究Ａの場合、２年目の成果は次年度の工学研究で要約する。原則として共同研究Ａ・Ｂ共に４～５頁。

（７）工学研究所プロジェクト研究報告

これに該当するものは、工学研究所の事業であるプロ

ジェクト研究 A・B・C の制度を利用して実施された研究の報告書である。プロジェクト研究の種類によらず、前年度の成果を要約する。原則として 2 頁以内。

（8）工学研究所テクノサークル活動報告

これに該当するものは、工学研究所の事業であるテクノサークルの制度を通じて工学分野を専攻する教職員と学生が中心となり互いに協力して取り組むサークル活動の報告書である。前年度の成果を中心に、各サークルの現状等を要約する。原則として 2 頁以内。

（9）随想

これに該当するものは、工学分野を専攻する教職員の研究・開発等の思い出、意見、感想、経験談等を綴った記事である。原則として 4 頁程度。

（10）工学通信

これに該当するものは、前年度 10 月からその年度の 9 月末までの工学系各組織の研究活動、講演会記録、および前年度の博士論文、修士論文、卒業論文を体系的にまとめた記事である。頁数は任意。

（11）工学研究所年次報告

これに該当するものは、前年度の工学研究所活動状況をまとめた記事である。頁数は任意。

（12）その他、編集委員会が設けた特別記事

記事の詳細は編集委員会が必要に応じて定める。

6. 原稿の作成および提出

（1）原稿は本規程および編集委員会が提供する『神奈川大学工学研究』原稿執筆要領に基づき作成する。

（2）用語は和文、英文どちらも可とする。ただし、和文原稿については英文目次作成のため、原稿には英文題目の他、著者氏名および職名・所属の英文名をつける。

（3）著者自身の公表済み著作物については、原稿中で出所を明示する等の正当な措置を講じること（著作権法第 32 条および第 48 条）により引用することができる。

（4）原稿は神奈川大学工学研究所事務局に提出する。そこで受理した日を原稿受付日とする。

（5）原稿の提出期限は各年度により定める。

（6）原稿の提出は、Word、PDF 等の電子データで行う。

（7）図版や特殊文字等に関する編集上の注意事項がある原稿については、電子データに添えて詳細を朱書きした出力原稿を合わせて提出する。

7. 原稿の責任と権利

（1）原稿に記載する資料の中で著作権に関わるものがある場合は、著者が自らの責任（費用を含む）で事前に許諾を得ることとする。

（2）前号に示した許諾には、論文等の電子化および

インターネット公開に関わる掲載許可も含むものとする。

（3）記事の著作権・編集出版権（複製権、公衆送信権）は神奈川大学工学研究所に属する。

（4）著者は記事が神奈川大学学術機関リポジトリにおいてインターネット公開されることに同意する。

8. 不正行為への対応

（1）提出された原稿、または記事に神奈川大学における研究に係る不正行為等の防止及び対応に関する規程（以下、不正行為規程という）第 2 条第 5 項各号に掲げる不正行為に該当する疑義が生じ、別に定める不正行為に対する編集委員会取り扱い内規に定める手続きを経て、編集委員会が不正行為に該当する事実があると認定した場合、編集委員会は不正行為規程第 25 条「論文等の取り下げ等の勧告」に準じ、著者に対し、当該原稿については以下 i）または ii）の処分、また当該記事については以下 iii）および iv）の処分を行う場合がある。

i）当該原稿の書き直しの指示

ii）当該原稿の不採録

iii）当該記事の掲載取り消し

iv）編集委員会が不正行為の程度に応じて決定した期間の本誌への投稿禁止

（2）提出された原稿、または記事に倫理綱領に定める研究倫理の理念と研究者の行動規範からの逸脱が著しい等の重大な不正行為に該当する事実があると本学当局が認定した場合、当該原稿または記事の著者は、前項各号の処分の他、本学当局より学内諸規程にのっとり罰則を科される場合がある。

9. 校正

（1）校正は原則として初校までとする。

（2）投稿原稿は完成原稿とし、原則として校正時の文言の一部修正のような軽微な修正以外、内容修正は認めない。

10. 抜刷・その他

（1）抜刷は発行しないが、希望する著者には本誌の PDF 版を提供する。

（2）原稿の枚数が第 5 条に定める規定限度を大幅に超過する場合は編集委員会の承認を要するが、状況により超過分の実費を徴することがある。

「神奈川大学工学研究」原稿執筆要領

工学 太郎* 工学 花子**

Preparation of Manuscripts for “Technology Reports, Kanagawa University”

Taro KOUGAKU* Hanako KOUGAKU**

1. 緒言

この「神奈川大学工学研究」執筆要領は、このファイル自体が工学研究原稿のテンプレートになっているので、著者が別にタイプしてある原稿をこの用紙内にペーストすれば、以下に記載する体裁の原稿が作成される。

テンプレートファイルは工学研究所事務局から著者宛にメールにより送付する。

原稿は、テンプレート（A4 判）に従って執筆し、提出の際は原稿のデジタルデータ（ファイル）を工学研究所事務局に提出する。ファイルは MS Word（Windows または Mac）または TeX（PDF 提出）とする。原稿記載の順序は、標題、本文、文献、付録、である。

2. 本文及び原稿の体裁全般

A4 判用紙を用い、本文レイアウト（1 ページあたりの文字数）は、30 字×50 行×2 段＝3000 字とする。ただしタイトルのみは 1 段組である。

MS Word の“ページの設定”の“文字数と行数”のタブ中の設定はフォントサイズ 8、段数 2 で文字数 30、行数 50 とし、“余白”のタブ中の設定は上 29 下 22 左 13.7 右 13.7 としてある。

和文文字は MS 明朝、英文文字は Times New Roman とする。ただし、記号などに Symbol を用いることが出来る。

本文、図、表及び式は原則として左右の段にまたがらないように書く。小数点は〔.〕を用い、カンマ〔,〕を用いない。句読点は〔,〕〔.〕または、〔、〕〔。〕で統一する。注釈の使用はなるべく避ける。

3. 見出し

諸記号の字体は次のとおりとする。

（種 別）	（字 体）	（例）
数学的演算記号	立体	\sin, \sinh
単位記号	立体	cm, kg, MΩ
ベクトル量	斜体	速度 V , 力 F
量記号	斜体	周波数 f , 長さ l
化学記号	立体	H ₂ O, BaTiO ₂

*教授 機械工学科
Professor, Dept. of Mechanical Engineering
**助教 建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture

文字の大きさは表 1 に示すとおりとする。

4. 図、写真及び表の作成

図、写真及び表は全てカラー表示が可能であるが、製本印刷はモノクロで統一し、PDF 版のみカラー掲載とする。このため、カラー表示を希望する場合は、モノクロ印刷時に識別できるよう留意する。

図、写真及び表が単段（片側）に収まらない場合は 2 段（両側）にまたがって書くことができる。

図、写真及び表の横に空白ができて、その空白部には本文を記入しない。

図、写真、表と本文及び図表相互の間は 1 行余白をとる。

図、写真、表の見出しは本文と同一言語とする。図及び写真の見出しはその下に、表の見出しは上に書く。

図、表中の記号類は、小さすぎて判別不能にならないようにする。また、複雑な記号類は、大きめに描くようにする。

写真は本文に貼るだけでなく、写真のファイルを添付する。

5. 数式

数式エディタを用いて記載する。

式は単列に書くように整形する。

字体は Times New Roman を使う。ただし、Symbol は使用できる。

数式は原則として文章の行の中に入れない。やむを得ず挿入する場合には、1 行高さを守る。

例 1〔分数式の例〕

…これは $(a+b)/(c+d)$ の形を取る。

例 2〔指数式の例〕

…電流は $i = I \exp(-t/\tau)$ の形となる。

文中でなく、式を別行にする場合には、次のように書いても良い。

その結果、〔上例の式〕は次の形を取る。

例 1〔分数式の例〕

…その結果、これは次式の形を取る。

$$\frac{a+b}{c+d} \quad (1)$$

例 2〔指数式の例〕

…その結果、電流は次式の形となる。

$$i = I e^{-t/\tau} \quad (2)$$

6. 文献記載方法

文中の文献引用は、引用箇所に文献ナンバーを上付きカッコでつける。

参考文献 (References) はナンバーに () や [] を付して本文末に列記する。

引用文献は原則として以下のように記載し、Vol., No., pp.等は省く (Vol. 30, No. 5, pp. 177-182 ではなく 30 (5), 177-182)。また、太字、斜体を用いない。

著者名は原則として全員記述し、あまりに多い場合は「他」や「et al.」と略してもよい。また、[,] で列挙し、欧文著者の場合、最後のつなぎに「and」を加える。

例 1 論文の場合

(和文誌)

[1] 松原茂樹, 加藤芳秀, 江川誠二, 英文作成支援ツールとしての用例文検索システム ESCORT, 情報管理, 51 (4), 251-259 (2008).

(欧文誌)

[2] J. E. Lee, M. L. Fusco and A. J. Hessel, Structure of the Ebola virus glycoprotein bound to an antibody from a human survivor, Nature, 454 (7201), 177-182 (2008).

例 2 プロシーディング (Proceedings) の場合

[3] C. Büttner, S. Weinzierl, M. Yabushita and Y. Yasuda, Acoustical characteristics of preserved wooden style Kabuki theaters in Japan, Proc. Forum Acusticum 2014, R03D_1 (Krakow, 2014. 9).

例 3 書籍・著書の場合

[4] 坂村健, グローバルスタンダードと国家戦略 (日本の<現代> 第 9 巻), NTT 出版 (2005).

[5] D. Frenkel and B. Smit, Understanding Molecular Simulation (2nd ed.), Academic Press (2002).

7. 原稿作成上のヒント

このテンプレートは Windows MS Word97-2003 文書で作成してある。著者が別に書いた原稿をコピーペーストすれば、自動的に割付が決定する。

Word からコピーペーストする際、書式情報無しのテキストのみをペーストするには、対象の文字または一文をコピーした後にメニューの“ホームタブ”から“形式を選択して貼り付け…”を選択し、“テキスト”を選ぶ。

第 1 ページ標題部分は 1 段組である。この部分では、項目ごとにコピーペーストが必要である。

本文は著者原稿から図、表、脚注を除いてコピーし、テンプレートにペーストする。その後で、図等のスペースを作ってテキストボックスを挿入し、その中に図などをペースト、あるいはファイルからの挿入をする、

第 1 ページの脚注 (著者所属など) には、直接入力しても、コピーした内容をペーストしても良い。

このテンプレートについて不明な点がある場合は、工学研究所事務局に問い合わせる。

8. 結言

校正は著者に依頼するので、校正刷りが到着後、速やかに校正を

済ませて、工学研究所事務局まで返送する。校正は内容が著者提出のハードコピーと一致することを確認するものであって、軽微な修正点を除き、変更を加えることはできない。

著者の責任による修正が生じた場合には、その修正に必要な実費を徴収する。

表 1 文字及びサイズ

題目	MS 明朝	14 ポ
著者名	MS 明朝	10 ポ
欧文題目	Times New Roman	12 ポ
欧文著者名	Times New Roman	9 ポ
本文	MS 明朝	8 ポ
本文の各節・小項目	MS ゴシック	8 ポ
図・表の見出し	MS ゴシック	8 ポ
参考文献・脚注	MS 明朝 Times New Roman	8 ポ

付録				
〔参 考〕 神奈川大学工学研究の配布				
刷り上がった神奈川大学工学研究は以下の各者に 1 部宛贈呈する.				
(1) 本学理事および工学部所属教職員.				
(2) 理, 工学部を有する国内の大学またはそれに準ずる学校.				
(3) 官公庁の研究機関.				
(4) 主要の学協会.				
(5) 民間の主要研究機関.				
(6) その他, 編集委員会が認めたもの.				
〔資 料〕 英文用語一覧				
Technology Reports, Kanagawa University	神奈川大学工学研究	Industrial Engineering and Management	経営工学	
Faculty of Engineering	工学部	Architecture	建築学	
Research Institute for Engineering	工学研究所	Mathematics	数 学	
Department (Dept.) of	学 科	Physics	物理学	
Mechanical Engineering	機械工学	Chemistry	化 学	
Electrical and Electronic Information Engineering	電気電子情報工学	Biology	生物学	
Material and Life Chemistry	物質生命化学	Professor	教 授	
Information Systems Creation	情報システム創成学	Professor Emeritus	名誉教授	
		Associate Professor	准教授	
		Assistant Professor	助 教	
		Research Associate	助 手	
		Technician	技術員	
		Graduate (M.C.)	大学院 (博士前期課程)	
		Graduate (D.C.)	大学院 (博士後期課程)	
		Research Student	研究生	
		Dean	学部長	
		Chairman of Dept. of ...	学科主任	
		Abstract	概 要	
			注: 工学部, 准教授, 助手, 技術員, 研究生などについては種々の	
			呼称があるが, 上記のように統一する.	